

中国の畜産業の動向と飼料需要の見通し

基礎研究部 副部長 清水徹朗

1 注目される中国のトウモロコシ輸入

国際穀物価格が再び上昇している。2008年にトウモロコシ価格が1ブッシェル7.5ドル(シカゴ相場)まで高騰して大きな問題になったが、リーマンショック以降下落に転じ、09年9月には3.0ドルまで低下した。しかし、その後再び上昇し、今年(11年)6月には一時7.9ドルの値をつけた。

こうしたなかで関心が高まっているのが、13億6千万人の人口を有し世界最大の穀物消費国である中国の動向である。中国は2000年頃より大豆の輸入量を急増させており、09年の大豆輸入量は4,255万トンとなり、中国の大豆輸入量は世界の大豆貿易量の5割を占めるに至っている。中国国内でも大豆を1,498万トン生産しているが、中国の大豆自給率は26%に低下している。

しかし、中国は穀物(米、小麦、トウモロコシ)については、一部、輸出や輸入を行っているものの、これまで基本的には国内自給を維持してきた。その中国が、昨年(10年)、トウモロコシを157万トン輸入した。輸入量が需要量全体に占める割合はまだ1%程度にすぎないが、中国がトウモロコシを100万トン以上輸入したのは15年ぶりのことであり、今後、中国がトウモロコシの輸入量をさらに増大させるのではないかと注目されている。

2 増大する畜産物消費量

中国では、経済成長に伴う所得上昇によって畜産物消費量が増加している。中国の肉類消費量(09年、1人当たり、家禽肉を除く)は農村部15.3kg、都市部24.2kgであり、10年間で

それぞれ10.1%、21.0%増加し、家禽肉の消費量は農村部4.2kg、都市部10.5kgで、10年間で1.7倍、2.1倍に増加している。

また、卵の1人当たり消費量(09年20.3kg)は10年間で19.8%増加し、牛乳の消費量(09年29.9kg)は10年間で4.2倍になっている。中国の人口はこの10年間で7.1%増加しているため、畜産物需要量全体の増加率はさらに大きい。

3 成長する中国の畜産業

こうした畜産物需要の増加に対応して、中国の畜産業も大きく成長している。09年における中国の肉類生産量は7,650万トン(日本の23倍)であり、10年前(99年)に比べて28.6%増加した。生産量のうち豚肉が最大で64%を占めており、家禽肉は21%で、牛肉は8%のみであるが、増加率は家禽肉が最大であり、家禽肉の生産量は10年間で42.4%増加した。

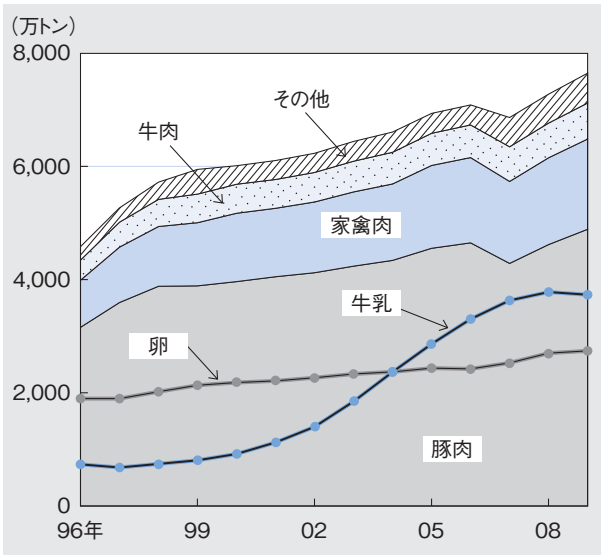
また、卵の生産量は2,741万トン(日本の11倍)で10年間で28.4%増加し、牛乳の生産量は3,735万トン(日本の5倍)で10年間で4.6倍になっている(第1図)。

なお、豚肉の生産地域は、四川省が最大(474万トン)で9.7%を占め、湖南省、河南省、山東省の上位4省で32.7%を占めている。また、家禽肉は山東省が最大(229万トン)で14.4%を占め、広東省、江蘇省、広西省の上位4省で38.9%を占めている。牛乳は、内モンゴルが25.7%、黒龍江省が15.0%を占めている。

4 小さい畜産物貿易の割合

中国の畜産業は主に国内向け販売を目的としており、輸出量は少なく、畜産物輸入量の

第1図 中国の畜産物生産量



資料 「中国農業発展報告」

割合も小さい。

豚肉についてみると、輸入量は53万トン、輸出量は18万トン(09年)であり、近年輸入量が増加しつつあるとはいえ、輸入量は生産量の1%程度である。家禽肉については、輸入量97万トン、輸出量30万トンで、中国は日本に鶏肉加工品を14万トン輸出しているものの、中国全体では輸出量より輸入量のほうが多い。また、牛肉は19万トン輸入している。このように、中国は肉類の純輸入国であるが、輸入量が供給量全体に占める割合は小さい。

牛乳・乳製品の輸入量は312万トン(08年、生乳換算)で、輸入量は急増しているが(10年間で3.4倍)、輸入量は生産量の8.4%である。

5 飼料需要の動向と今後の見通し

中国では、畜産業が大きく成長するなかで

(注)DDGS(Distiller's Dried Grains with Solubles)とは、トウモロコシ等の穀物からアルコールを生成した後に残る蒸留粕であり、たんぱく質や脂肪などが豊富なため配合飼料の原料として使用される。米国ではバイオエタノール生産の拡大でDDGSが大量に生成されている。

飼料需要が増大しており、飼料用として最も多く使用されるトウモロコシの生産量(09年16,397万トン)は、10年間で28.0%増加した。また、中国が大量に輸入している大豆は主に油脂用であるが、搾油したあとの大豆かすは畜産の飼料として利用している。また、中国は乾燥キャッサバを主にタイから飼料用に輸入しており(07年467万トン、08年200万トン)、米国のDDGSの輸入量も急増している。

中国には農家による零細な畜産経営も多くあるが、大規模な畜産経営が徐々に増加しつつあり(養豚では大規模経営の生産割合が4割を占める)、この傾向はさらに進む見込みである。日本の畜産において60年代以降起きたことが、現在中国で起きているといえよう。小規模な畜産農家は自家飼料を使うことが多いが、大規模畜産では配合飼料(購入飼料)に依存する割合が高く、大規模畜産の拡大や家禽生産の増大に伴って配合飼料需要が急増しており、一部の配合飼料原料では輸入量が増えている。

ただし、トウモロコシについては、09年までは東北地方(黒龍江省、吉林省)や河南省などの国内産を100%使用しており輸入はほとんどなかったが、昨年(10年)は100万トンを超える輸入に至った。中国では、トウモロコシは、飼料向けが62%、工業原料向け(でんぷん、アルコール用)が26%であり、工業原料向け需要も増大しているため、今後、中国のトウモロコシ輸入量はさらに増加するとの見方が強まっている。その一方で、大量輸入に至った大豆の「反省」もあるため、中国がトウモロコシの大量輸入に至ることはないであろうとの見解もあり、中国のトウモロコシ輸入を巡る今後の動向が注目される。

(しみず てつろう)